食べ処

村内には次のような食べ処があります。

	場所	店名	おもな食べ物	電話番号
1	下生野	むつみ	きのこ料理　季節料理	69－2574
2	目　崎	わらく	おやき　焼肉　そば	69－2169
3	上生坂	やまなみ荘	川魚からあげ　ぎょうざ　季節料理　いなか料理	69－2032
4	上生坂	まるはち食堂	ラーメン　焼そば　カラオケスナック	69－2963
5	草　尾	勝家商店	おやき	69－3105
6	草　尾	甲麦沢やきもち店	おやき　うどん　すいとん　いなか料理	69－3138
7	下生坂	ドライブインいくさか	おやき　食事　小宴会	69－2115
8	大日向	竹乃内旅館	うどん　自家製そば　山菜料理	69－3066
9	大日向	湯の沢温泉	季節料理　焼肉	69－3006
10	山清路	清郷	食事　カラオケスナック	69－2964
11	吉　坂	吉坂温泉	季節料理	69－3030

やまなみ荘

やまなみ荘結婚式場

結婚式の料理

アカウオ（ウグイ）

タイの姿つくり

よせなべ料理

おやき・きのこ・果物

観光開発

生坂村は古い歴史と文化、美しい自然を持った村です。村では商工会と協力し観光協会を設立して、次のような観光事業に取り組んでいます。

1．水鳥公園　山清路　日岐の遊歩道　やまなみ荘などの整備
2．特産品や郷土料理などの開発
3．観光物産店への参加
4．観光宣伝にかかわる事業
5．体験のできる観光開発

県立公園山清路

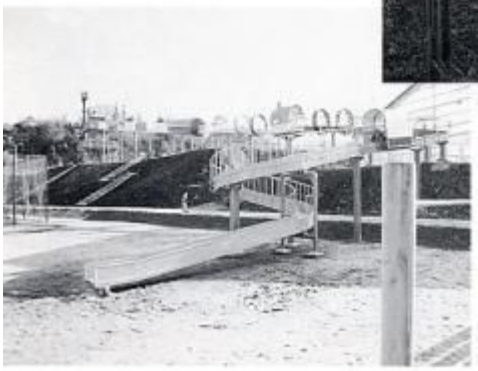
説明板

水鳥公園での探鳥会

カモの仲間

史跡名勝の多い日岐の遊歩道

小立野入岩州公園の不動岩　小石を投げ、穴に入れば願い事がかなうといわれる。


スポーツパークの83mのすべり台、他にテニスコート、室内ゲートボール場などがある。

有名な人物

famous person

生野臨犀（いくのりんさい）　文化8（1811）～明治28（1895）

本名は克長（かつなが）、下生野の平野元嘉（もとよし）の長男として生まれ、幼少のころから大志を抱き13歳の時に、ある青年が五社のお祭りの芝居を何日練習しても上手にならないのを見て、この努力を学問に向けたら志を実現することが出来るだろうと決心しました。田島堂の坊様から中国の難しい四書（ししょ）・五経（ごきょう）の本を習い40日間で修得してしまったので、わずかの金を持って生坂煙草の商人と240kmも歩いて江戸へ出ました。

当時神田で塾を開いていた福島県出身の有名な漢学者の安積艮斉（あさかごんさい）の門人となり、貧苦に耐えて一心に勉強し学問の奥義を究めました。そのころは外国船が日本近海に出没し幕府も困っていた時なので、海岸の実地踏査をしました。

45歳の時ペリーが来航し幕府は品川に砲台を築きましたが、臨犀はこれを批判し「海防策」を作り上申（じょうしん）しました。しかしそれにより江戸を追放され、僧になって加賀の永平寺で講義をしていたところ藩主の前田侯に認められ、藩校の教授となり100石与えられました。

明治4年、廃藩置県（はいはんちけん）の時「国体策」を作って加賀藩から新政府に意見書を出しましたが認められなかったので、自分は時代に向かない事を悟り、藩校を辞（や）めて下生野に帰りました。時の筑摩県知事永山盛輝にも招かれ論語の講義をしましたが、教えが厳しく個性が強かったので嫌われ県学校を辞め、下生野で塾を開き子弟を教えました。時に64歳でした。

明治6年堂で学校が開かれた時、小立野と下生野の初代の先生もしましたが2年間で辞め、青年男女を集めて学問を教えたり、文章や字を書き、友を訪ね、酒を飲み悠々自適（ゆうゆうじてき）な生活をして88歳で亡くなりました。村内には多くの書や神社の額（がく）があり、著書に「会友録」「自得堂文章（じとくどう）」があります。頌徳碑（しょうとくひ）も五社に建っています。

加藤正治（かとうしょうじ）　明治4（1871）～昭和27（1952）

上生坂の一星（いちぼし）、平林家に生まれ、松本中学、第一高等学校を経て明治30年に東京帝国大学（東大）法学部を優等で卒業、日本郵船副社長加藤正義の養子となりました。32年破産法（はさんほう）研究のためドイツ・フランスに留学し36年帰国と同時に東大教授、翌年33歳で法学博士となり、破産法の世界的権威者になりました。

大正14年帝国学士院会員、昭和6年定年退職して東大名誉教授、戦後は枢密顧問官（すうみつこもんかん）の要職（ようしょく）につき憲法改正に参与、23年には中央大学総長に就任しました。

郷土のためには大正6年信濃木崎夏期大学設立の理事に就任を始め、東京長野県人会創立の副会長、松本中学校（深志高校）の同窓会長などを務めて後輩の指導に尽力しました。

また俳句は明治33年ドイツに留学中、巌谷小波（いわやさざなみ）がベルリンの学校へ講師として赴任（ふにん）した時に小野酔香（すいこう）などと百人会を創立して会員となり、帰国後は信州出身者の句会「田毎会」を運営しました。俳号を犀水（さいすい）と称し、松本地方では各地に犀水会を作り俳句の指導に当たりました。妻は玉瑛（ぎょくえい）と号し絵のたしなみが深く、合作句碑が松本の城山にあります。犀水の句碑は数多く、上生坂卒塔婆（そうとうば）の9人句碑・差切峡・明科竜門寺・本城・四賀・池田・穂高・大町その他にあります。頌徳碑、記念碑の撰文（せんぶん）も各地にあります。

昭和27年狭心症のため81歳で亡くなりましたが、著書には「破産法の研究」「海商法講義」「民事訴訟法判例批評集」などがあります。

少年時代から勉強家で教科書を筆で写し、漢学は生野臨犀に学びました。生家の一星には学生時代に書いた勉強法や日記・作文などが残されています。

有名な

平林鳳二　明治3(1870)～昭和2(1927)

上生坂一星の分家に生まれ、通称は縫治といい巨城・巨城含と号しました。小学校卒業後、松本神道分局の小山進大教正について和歌・国学を学び、20歳から生坂郵便局長を3年勤めてのち東京へ出て生命保険会社員となりました。そのかたわら俳諧を伊藤松宇に学び、文人、国学漢学者や書画の研究をして「書画珍本雑誌」を刊行しました。

その後大阪・京都に転住し、書画骨董・古俳書の売買を業とし、その鑑定考証では関西の第一人者となりました。また、内閣印刷局の命により大阪府下に官報販売をしたり、印刷機械・木製玩具の製造工場の経営もしました。

俳人としては東京秋声会新興派として名声が高くなり、大正12年に大西一外と共著で、文亀元年から大正12年までの約6,000人の俳人の消息について書いた「新撰俳諧年表」を刊行、翌年「蕉村の俳諧学校」を出版しました。その他古人の墨蹟帖「難波津」その他の編著があります。

昭和2年上生坂の卒倒坂の桑園を青年団に寄付して公園を造ったり、鳳二文庫を寄付しました。青年団はお礼に「あの山が高いか雲雀高かろか」の句碑の建立に協力。4月20日の除幕式を機会に東西の著名な俳人21人を招き、翌日は照明寺で巌谷小波がおとぎ話を小学生に話したり、大家の講演会や大句会があり、23日には小学校で活動写真や松本よりの音楽隊や演劇の催しがあり、会衆は約2,000人、開村以来の大盛況でした。この催しを記念し、「雲雀桜」の著書と「記念俳句大集」「巨城鳳二選」があります。鳳二はこの年の10月急逝しました。死を悼んで「桜おち葉」「つゆ草」の追悼集や卒倒坂には小波揮毫の「雲雀桜」の碑と昭和17年加藤星水がその時生坂へ来遊した俳友に呼びかけて建立した平林鳳二追悼9人の句碑があります。

宮川良治　明治11(1878)～昭和5(1930)

上生坂の神官の家に生まれ、池田高等小学校、東京邦語学院（現中央大学）法学科を明治32年卒業、医者志望でしたが長男の故に許されず、帰郷しました。33年22歳の時に青年団の前身「帝蓮」を組織し、37年上生坂青年団を創設、夜学を開始して講師を勤め名誉団員となりました。

41年30歳で収入役に就任し大正元年まで勤務、44年より生坂農会副会長、上生坂耕地整理組合長、生坂農会長、村会議員を歴任し、大正8年より一期郡会議員、12年より一期県会議員、その他組合製糸三栄社組合長、明科簡易水道組合長、郡産業組合会長、生坂村信用販売組合長に就任しました。昭和になってからは県農会議員、県製糸協会理事、犀川線期成同盟会副会長、大日本生糸販売組合理事になりましたが、同5年5月波田村で産業組合10周年記念の講演中、脳卒中で倒れ52歳で急逝しました。

このように産業交通面で郡県下においても功績は大でしたが、生坂において特筆すべきものは上生坂の耕地整理開田事業です。上生坂下段の開田計画は江戸時代から明治10年まで3回ありましたがいずれも失敗でした。

明治44年県耕地整理事業の奨励があったので、平林利作、平林行雄、滝沢富雄と4人が発起人となり、県へ地形調査を依頼し動力ポンプ揚水可能の見込みがついたので、有志と図り反対する人々を説得し、45年県へ測量設計補助申請を提出、大正元年10月耕地整理組合を設立し組合長になり、経験ある土工に請負わせて着工しました。

揚水機械は新潟石油ポンプの鉄工場に請負わせ、翌2年6月池沢の石炭を使用した蒸気機関による揚水試運転式が行われました。長野県下では最初でしたので、県郡農事試験場関係者、新聞記者等多数参列し成功を喜びました。この年12.6ha、翌3年4ha、合計16.6haの開田に成功したので、県下の各地から視察者が多く生坂は煙草と共に有名になりました。

人物

famous person

牛越久瑳（うしこしきゅうざ） 天保9（1838）～明治26（1893）

宇留賀会の人。庄屋の家に生まれ、安政5年（1858）父の跡を継ぎ庄屋となり、文久3年（1863）大日向村の庄屋も兼務し、明治5年（1872）宇留賀村戸長となり、同7年郵便取扱所を命ぜられました。翌8年広津村初代村長に就任し、19年辞任、21年には北安曇郡耳（みみ）谷町村会議員となり、22年より亡くなる26年まで再び広津村長を務め、庄屋時代から35年間も村政に関与しました。また23年に広津郵便局長を辞するまで郵便事務を17年間取り扱いました。

この間交通関係に大変な努力をしました。明治4年山清路道の開削（かいさく）に着手し、新町まで川手街道開道の計画を立て、関係村と相談し陸郷・広津・八坂村より3,000円、日原・水内（みのち）村より1,000円、計3,000円の借用を長野県へ請願しました。久瑳は総代として県庁へ出頭すること75回、ついに金を借りて工事を進め12年に新町道ができました。更に県道編入を県庁に請願し、13年11月県会は三等県道に編入を決議し、3,000円も県費で弁償することに決まりました。

15年には池田町へ行く新道を計画して、袖沢に新道を開き、17年には和合橋を架けました。20年生坂・坂北村の有志と相談して差切新道の計画を立て数百円を募集し東筑摩郡会へ補助金を陳情し、24年工費1万85円余の内、半額の補助を得て遂に差切の難所が開通し、坂北麻績方面へ川沿いに車馬が通れるようにしました。26年には池田町の有志と相談し袖山新道（現上生坂―松川線）の大改修をしました。

山清路橋の架橋（かきょう）についても努力しましたが生存中は実現せず、死後8年たって明治34年に山清路橋が完成し、車馬で広津・陸郷村方面からも前年開設した麻績・西条駅へ行けるようになりました。

井口周司（いぐちしゅうじ） 明治33（1900）～昭和60（1985）

上生坂の人。昭和32年生坂村が陸郷村の一部、広津村の一部と合併し、新生生坂村の初代村長として昭和50年10月まで18年間村の先頭に立って現在の生坂村の基礎を築き上げました。

主な事業をあげてみると次の通りです。

昭和34年未曾有（みぞう）の台風大災害の復旧、39年中央と南部に簡易水道の完成、43年役場庁舎の新築と村章の制定、46年総合福祉センター「やまなみ荘」新築、49年村民会館新築、50年長野県道疏（か）代行第1号として大日向橋の永久橋架け替え、その他有線放送施設、山間部落への道路改修や他村に先がけて道路の生コン舗装（ほそう）など、活躍しました。

村では昭和45年在職15年を記念し業績を讃え、役場前に記念像を建てました。

平林盈淑（ひらばやしみつよし） 寛政2（1790）～万延元（1860）

上生坂一星の人。通称文五右衛門、のち豊五右衛門桃泉と号し、父の跡を継いで名主となり、松本藩の御用達をし御用金を差し出したので苗字帯刀（みょうじたいとう）を許されました。

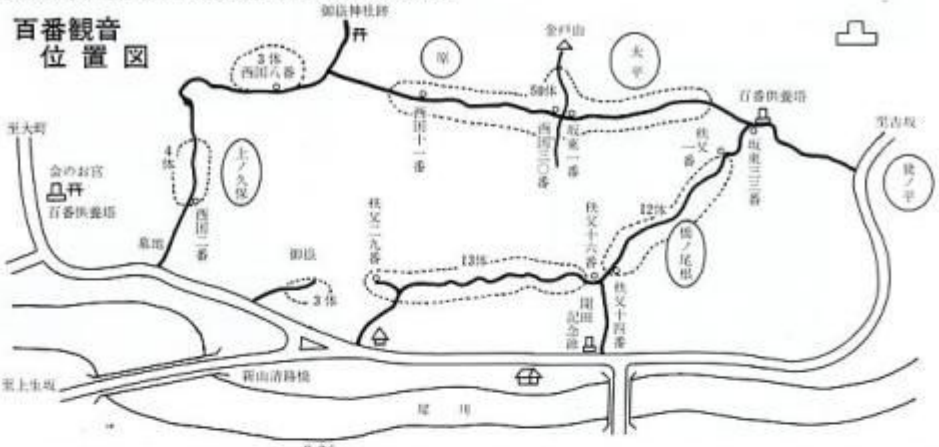
犀川から水を引く開田工事に私財を投じ、嘉永6年（1853）6haを開田しましたが大洪水で流失してしまいました。安筑両郡の煙草荷主総代として度々江戸へ出て文化を取り入れたり、文政12年（1829）の宿場との口銭（こうせん）（荷物手数料）訴訟の時は荷主に有利な規定にしました。

その他犀川善請（よしん）の境界論、入会（いりあい）山論、寺院の訴訟など解決のつかない難問題を解決する力があったので、松本地方の人々から6万石の大人物と称賛（しょうさん）されました。

また、書道や和歌をたしなみ、道徳の話に優れ、お茶を立てて近隣の人々を招いて修身、斉家（せいか）、勤勉、忍耐、油断などの訓話をしたので生坂の徳風を高めました。

著書に「家章訓論（かしょうくんゆ）」「家業末記」「農業大全」などがあります。

山清路金戸山の百体観音



観音様は33に変化して人々を救いご利益を下さるという信仰が江戸時代に広がり、霊場に33番観音を建てたり霊場巡りをすることが流行しました。一般に百体観音は坂東（関東）33番、秩父34番、西国33番の合計百番の観音様をいいます。

金戸山には国道上に秩父34番が、会の墓から金戸山へ西国33番が、金戸山から鷺ノ平へは坂東33番の観音様があります。今まで調査では、74体と台石のみが14体の計88体と、百番供養塔2基が発見されています。

1．種類　千手観音26　聖観音39　如意輪観音7
　　馬頭観音2　計74

2．番号あり　秩父17　坂東20　西国12　計49　他風化

3．寄進名あり　宇留賀9　古坂2　池田3　大日向1
　　八坂の田屋1

4．製作者名あり　田屋村石工常右衛門1

5．御詠歌　比較的読めるもの10，他は風化

6．百番供養塔2

○会のお宮　寛政10年(1798)観道和尚建立

○鷺ノ平上　文化7年(1810)牛越恵之助建立

この二つの供養塔により180年ほど前に和尚さんや牛越さんの発願により、近在から寄付を集めて建てられたものであることが想像されます。

西国坂東秩父百番供養塔

石工名のある如意輪観音

十一面千手観音

御詠歌のわかる聖観音

財

数多い道祖神

道祖神は、旅人の安全を守る神、他村からの悪病などの悪霊が入るのを防ぐさえの神（塞の神）、男女両性の縁結び、夫婦円満、子供が授かり成長を守る神、豊作、幸いの神として古くから信仰されていました。特に江戸時代になって信仰が広がり、一般にはどうろく神（道陸神）と呼ばれ、村の出入口や辻に建てられました。子どもの行事として正月に門松や小屋を道祖神の近くに建てて焼く三九郎とかおんべといわれる祭りが行われてきました。

道祖神には自然石、陽陰石、双体像、文字碑があります。生坂に現在残っている道祖神を集落別に分類してみると右のとおりです。

小立野	双体11	文字7	自然石1	陽石0	計19
下生野	〃 7	〃 2	0	1	10
上生坂	11	3	0	0	14
下生坂	7（同2）	5		2	14
日　岐	7	0	1	陰陽2	10
牽　尾	6（〃1）	0	1	1	8
昭　津	2（〃1）	0	1	陰陽2	5
大日向	3（〃1）	0	0	0	3
宇留賀	5	2	1	0	8
古　坂	1	0	1	2	4
計	60（〃5）	19	6	10	95

享保14年の宇留賀大岩の道祖神（1729）

95体の内、年号のあるものは51体で大岩の享保14年（1729）が最古
最新は昭和12年
江戸時代37　明治11
大正2　　昭和1
一般的に双体道祖神は古く、文字道祖神は新しいものです。

帯代25両と刻む日岐第一の道祖神

昔は隣村から道祖神を盗むことが時々あったので、帯代として代金を何両と刻んだのが14体あります。最高は日岐の25両、最低は下生野ねぶの1両1分です。5両から10両までが一般的で、6体あります。

やすで屋根をふいた万平の祠型道祖神、正月にはしめ縄、やす、酒樽などを供えます。

文久3年（1863）鳥原の陽石道祖神
（高さ72cm　周囲105cm）

「子どもが授かりますように」と、陽石や陰石を道祖神とした所が6カ所あります。

筆塚・頌徳碑

江戸時代から、明治初年に学校ができるまでの勉強はお寺やお堂の僧、神主、村役人の庄屋・名主等によみかき、そろばん、俳句、作法などを教えてもらいました。最初はお寺でお坊さんが教えることが多かったので、先生のことを一般的に寺子屋師匠といいます。生坂の寺子屋師匠調査はまだ充分にできていませんが、28人いたことがわかっています。

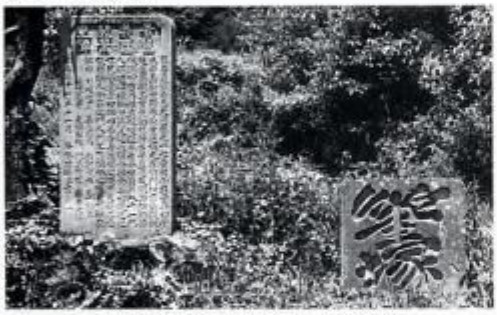
生徒のことを寺子・筆子・門弟などといいました。生徒は先生の徳をたたえて先生が亡くなると、時には生前中にお金を出し合ってお墓や頌徳碑を建て、筆子中、門弟中などと刻みました。このような墓や頌徳碑のことを筆塚と呼びます。筆塚の最初は、使い古した筆を集め土に埋め供養塔を建てたようです。

今までにわかっている寺子屋師匠や筆塚の所在地は右の表の通りです。(◎印は筆塚　○は墓を兼ねた筆塚　△は頌徳碑)

小立野	平林弥源太◎　平林有儀
下生野	野村吉五郎○　生野臨岸△　小林幸十郎○　高野倉蔵◎(池沢)
上生坂	平林豊後右衛門、滝沢管城◎　黒山覚道◎　宮川正直、吉田右中、吉沢脇吉、井口宥洗◎(丸山)
下生坂	石田兵一○(込地)　井口茂△(入山)
日岐	寺島九左衛門◎　寺島義侍◎　安坂萬四郎◎(原)
草尾	中山初右エ門(はせくぼ)　梶原忠左衛門◎　梶原官蔵・善六・登三代◎、市川源四郎◎(牛沢)
大日向	牛越治左衛門(北平)小林其内(南平)小幡斉加(北平)○
宇留賀	宮嶋清◎(大岩)　平林昌樹△(山清路)　中村風留紀◎(古坂)

筆塚13、墓を兼ねた筆塚4、頌徳碑3、合計20基。年代別にみると、小林幸十郎が明和3年(1766)で最も古く、次は寺島九左衛門が弘化3年(1846)で、他は明治時代が15基です。頌徳碑は全部昭和になってから建てたものです。

明治以後生坂の人々は先生を敬い、教育を重んじたことが筆塚や頌徳碑によってわかります。



日岐　寺島九左エ門・義侍の筆塚頌徳碑
(弘化3年4月・明治21年11月)

小立野　平林弥源太筆塚
(明治4年3月)

草尾　梶原忠左衛門筆塚(明治20年8月)

下生野　野村吉五郎墓を兼ねた筆塚(明治14年10月)

数の多かった寺堂

生坂には現在38の寺堂があります。江戸時代から大正時代までには各集落にはもっと多くの寺堂があって、人々は時々集まってはお祭り、葬式、相談ごと、お参りなどをして集落中の助け合いや団結を図る心の拠り所としました。堂の内外には多くの文化財があります。

現在わかっている寺堂数は74、その内約半数の36はありません。

下生野の田島堂

小立野 11(6)
観音堂　天神堂　地蔵堂　十王堂×以上平　庚申堂　薬師堂　虚空蔵堂　聖堂×　観音堂×　阿弥陀堂2×以上入

下生野 4(1)
阿弥陀堂×　田島堂　大日堂×　池沢薬師堂×

上生坂 12(6)
薬師堂　虚空蔵堂　古み堂×以上小身　毘沙門堂　観音堂　地蔵堂　照明寺　阿弥陀堂×　荒神堂×　地蔵堂×　丸山大日堂×　開屋の堂×

下生坂 13(6)
薬師堂　虚空蔵堂　竹ノ本阿弥陀堂　雲根観音堂　込地薬師堂　重地蔵堂　鳥原真正寺(十王堂)×　木村阿弥陀堂×　雲根大法寺×　込地大日堂×　込地十王堂×　入山薬師堂×　入山観音堂×

日岐 3(2)
薬師堂　大岩阿弥陀堂　正福寺×

草尾 7(5)
毘沙門堂　薬師堂　地蔵堂　怡山薬師堂　長谷久保地蔵堂　牛沢観音堂×　草尾山大日堂

昭津 3(3)
庚申堂(観音堂)　大久保観音堂　大久保阿弥陀堂

大日向 6(3)
南平　常円寺×　阿弥陀堂×　中塚庚申堂　北平　阿弥陀堂　地蔵堂　玉泉寺×

宇留賀 11(3)
大日堂　才光寺の毘沙門堂　観音堂×　十王堂×　木村の薬師堂　常清寺×　会の阿弥陀堂×　薬師堂2×　権現堂×　鷲平阿弥陀堂×

古坂 4(3)
薬師堂　観音堂　柳久保阿弥陀堂　上平阿弥陀堂×

（　）内の数は現存数、×はないもの

大日向の阿弥陀堂

小立野岩州の薬師堂

古坂の薬師堂（修理前）

庚申塔・文化財

生坂村にはたくさんの庚申塔があります。庚申塔は庚申講の仲間で建てた供養塔です。庚申信仰は60日あるいは60年ごとにやってくる庚申の日や年に禁忌を要求した信仰で、古く中国の道教からきたものです。江戸時代には庶民に広がり庚申仲間ができ、念仏を唱え、徹夜して語り明かし、相互援助の無尽貯金、相談ごと、懇親の飲食などをしました。元禄のころから輪六本の青面金剛の像に、見猿・言わ猿・聞か猿の三猿を刻んだ庚申塔や祠型庚申塔、文字庚申塔を、庚申講中で、村の辻や社寺堂の境内に建てることが流行しました。

小立野入の庚申塔

元禄3年（1690）庚年から昭和55年庚申年までに建てられた青面金剛像・祠型・文字など9基の他に、巡礼塔・二十三夜塔が建つ。一カ所にこれほどそろっている所は珍しい。

堀本の庚申塔

(右)石祠型庚申塔
六地蔵を刻んだ庚申塔で珍しい。

(左)青面金剛の庚申塔
日月、鶏、三猿を二段刻む。
延享3年（1750）

下生野　生野臨犀頌徳碑
明治13年の撰文を昭和15年に建立

星谷小波の雲雀桜碑（昭和2年）

白日の赤地蔵　江戸初期の作
無い事をきいてくれて日照りから救って下さる。

上生坂ひばり桜の平林風二句碑（昭和2年）